第436号　昭和56年10月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

1981年（昭和56年）
10月号（No. 436）
社団法人　日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

委員会会議開催さる……………………（1）
遠来の客と過ごした二十二日間
　婦人懇談会……………………（2）
海外の山では……………………（2）
四姑娘山登頂の報告
　川田哲二……………………（2）
図書紹介……………………（4）
「佳境に入った烏水全集」「ヴァリス・アルプス」「アルプス登攀記」
高所登山と順応　山森欣一……………………（5）
科学研究委員会講演会第九回概要
　山をめぐる宗教と伝承
　宮家　準氏……………………（6）
東西南北……………………（6）
　ボゴダ峰遠征隊より
　上高地山研礼賛
お知らせ　東海支部・指導委員会他（8）
報告　北海道支部・科学研究委員会
　海外連絡委員会……………………（8）
追悼　柳沢　悟氏を悼む……………………（9）
図書受入報告　図書委員会……………………（10）
ルーム日誌・会員移動……………………（10）
カット／松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

委員会会議開催さる

——役員、委員七十八名が参加——

さる七月十九日（日）私学会館において、初の試みである「委員会会議」が開催され、七十八名の役員、委員が出席して熱のこもった討議が行われた。当日は夕刻から「新旧役員会および懇親会」もあわせて開かれた。

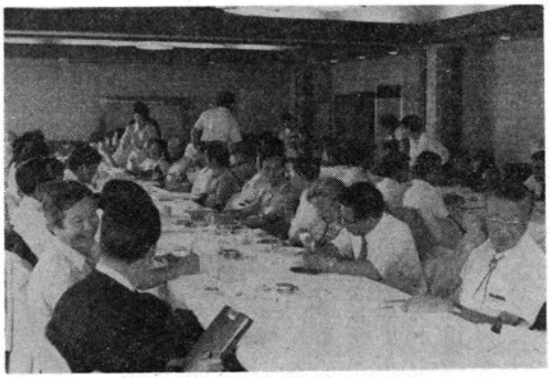
会議は次の順序で進行された。

1、委員会会議
＜午前＞　全体会議
＜午後＞　分科会、委員長会議
2、新旧役員会と懇親会

全体会議は、十時十分、神崎常務理事の司会により始められた。まず佐々保雄会長が挨拶に立ち、「流動化している登山界のなかで、日本山岳会の考えをまとめ会員として活動出来ることが喜びとなるよう、一層有意義な山岳会づくりのために、多くの方々の率直なご意見をお聞きしたい」と呼びかけた。

ついで渡辺兵力副会長から「日本を代表するクラブとして国際的な活動を望まれるなかで、会員が心を合わせて活動出来るように、また初の試みであるこの会議を成功させるためにも活発な発言を望む」との挨拶があった。

続いて委員会の活動報告に入り各委員会の担当理事、委員長が順番に壇上に立ち、約五分間ずつ、過去の活動状況、今期の活動方針を報告発表した。各委員会の報告で目立った点は、①各支部との交流の活発化、②会員サービスの充実、の二点であった。特に支部との交流の活発化は佐々会長自らも触れており、今後の進展が期待されよう。この日、出席の役員、委員は、こうした全委員が一堂に会したなかでの活動報告は初めてだけに、他の委員会の活動をよく理解することが出来た模様。



委員会会議会場／撮影　坂本正智

十二時三十分から一時までは昼食会。久し振りに顔を合わせた会員も多く、あちこちでにぎやかな話の輪が出来ていた。この休憩時間を利用して「アンケート」も実施された。会運営の諸改善のために活用される予定である。

午後は一時から四時三十分まで六つの小会場に分かれて、分科会が行われた。人数の多い委員会は単独で、少ない委員会は関連のある委員会同士の合同で討論。テーマは、①日本山岳会の全般的なこと（運営のあり方）、②各委員会の活動、③課題討議、の三つがとりあげられた。

①のテーマは、今回の会議の柱の一つであっただけに議論百出のところが多かった。若い人の層が薄くなってきていること、活動がごく一部の会員だけに偏っていること、隆盛になったわが国登山界にあって当会の今日的なあり方が問われていること、等々日頃感じている不安、問題点が多く出された。出席者の多くは〝何となく漠然とした不安感〟を大なり小なり持っており、それが切実な討議となった模様。対策として、当会の「強み」を生かした存立基盤の再認識、委員会の運営の改善、会員の活動参加の促進、などが話し合われ、今後の山岳会の活動のなかに生かされることとなろう。

②のテーマは、あらかじめ各委員会で用意した「年間活動計画（案）」をもとに話し合い、その決めこみをはかった。海外山岳会との交流（海外、自然保護、青年懇談会、婦人懇談会の各委員会）、諸行事の活発化など、積極的な計画が組み立てられた（詳細は別途掲載の予定）。

午後四時三十分からは委員長会議となり、分科会で討議した結果を各委員長、担当理事が持ち寄り席上かいつまんで発表した。今期

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

留守番電話（電話番号234—六六五九）

活動計画の概要が総合されて明らかになり、海外との交流をはじめ、委員会同士タイアップする必要のある行事も多く、全体会議のまとめとして意義があったものと思われる。

　五時すぎからは、新旧の役員が集まっての「業務の引き継ぎ」が行われ、その後で懇親パーティにうつった。酒がまわるにつれて会も次第にボルテージが上がり、会長、副会長が得意のノドを披露するところには最高潮に達し、盛んな拍手がわいた。

　こうして朝から夜遅くまで、文字どおり〝一日がかりの山岳会デー〟は、初の試みではあったが、盛り沢山のテーマを消化して、一応成功裡に幕を閉じた。もちろんこの十時間をかけてなされた討議が、これからの山岳会の活動にしっかりと反映してこそ真の成功といえるであろう。

（文責・西村政晃）

遠来の客と過ごした二十二日間

――インド人女性三名を迎えて――

婦人懇談会

　一九七六年、第二回日印女子合同登山（カメット）が終ったとき私たちが考えましたのは、インドの仲間と日本の山を登る、つまり、ちょっと大げさにいえば第三回の合同登山を日本の山で行いたい、ということでした。

　カイラシュ・ピーク（一九六八年）、カメット（一九七六年）、そしてケダルナート（一九八〇年）、と私たちはインド登山財団にひとかたならぬお世話になっており、また山登りを通じてたくさんのインドの友人を持つことができたのですが、これらの山仲間に、小さいけれど美しい日本の山にも登ってほしいと考えたからです。この計画が、一九七七年サリーン氏に提案後四年を経て実現し、来日メンバーがミーナ・アガルワル（カイラシュ・ピーク、カメットのリーダー）、チャンドラ・プラバ・エイトワル（カメット）、ラマ・セン・グプタ（カメット、ケダルナート）と旧知のメンバーであったのは、本当に嬉しいことでした。

　スケジュールは七月四日成田着、北アルプスの代表的な山をいくつか登り、関西を回って東京へ戻る、という三週間の旅です。この間にインド登山財団からの要請により、インド・ヒマラヤのトレッキング説明会を当会ルーム、関西支部、朝日カルチャー登山教室と三回実施しております。

　三人とも明るく活動的で、再会のメンバーはもとより、初めての者も旧知の友だちに会ったようで、三週間がたちまち過ぎ去ってしまいました。そして私たちにと

海・外・の・山・で・は……

カラコラムでは早大単独チームのK２（八六一一メートル）西稜初登攀が光る。松浦輝夫隊長ら十二人。うち四人は海外登山が未経験で、「二枚ほど駒不足」の懸念をよそに、十人の死闘からつかんだワンチャンスをものにした。ボニントン（一九七八年）、スコット（八〇年）が失敗した同山域難題の一つであった。

　もう一人の立役者はナジール（パキスタン山岳会員）。当初の参加申し入れを拒否、現地で直接面接の結果、ゲスト・クライマーとして採用された。七七年の日山協隊では登頂隊員からもれた経過もあり、彼の意欲と行動力はすさまじいものだったという（同国のK２登頂は、日山協隊のアマンについで二人目）。大統領もこの成功を喜び、早大百年祭にふさわしい親善の成果をもたらした。

　酸素はNASA使用の三百気圧ボンベ（八・四キロ）。睡眠用が主使用だったが、大谷映芳、山下松司、ナジールの登頂隊はボンベを八三〇〇メートルで脱装、八五〇〇メートルでビバークし、八月七日午前十一時四十五分登頂。ラカポシ登頂の大谷は下降中に幻覚に悩み、学生一人は脳血栓にかかったが、ツクチェピーク経験だけの米本隆夫は二十八日間の高度（七千メートル以上）滞在記録を作るなど、技術以上に、単独チーム特有の面をうかがわせる登攀だった。

　カラコラムへの日本隊は十一。早大隊のほか、長野県山岳協会のガッシャブルム峰（八〇六八メートル）、千葉工大のカンジト・サール（七七六〇メートル）など五隊が成功した。

　日本人の海外登山中の遭難のなかで、高山病に起因する部分が注目されている。五月の中国ミニアコンカ（七五五六メートル）での北海道山岳連盟隊の八人もこの面が指摘されており、八月のクングール（七七一九メートル）での鳴満則ら三人の遭難も、アルパインスタイルだっただけにそれをうかがわせる。その他マッキンレー、インドのクン峰などの場合は社会問題として取り上げられた。七月五日、第一回日本登山医学研究会（会長、北博正氏、日体大）が慈恵医大高木会館で開かれた。九月十二日には、C・ハウストンが成田に寄港、中島道郎と会談したが、同氏は、目下エベレストで行っている米メディカル・リサーチ・エクスペディション（米山岳会、米地学会、米胸部学会など後援）のアドバイザーとして現地に赴く途中であった。わが国のこの分野の組織的研究が望まれる。

　長谷川恒男はアコンカグア南壁単独冬季登攀に成功（八月十七日）、欧州三大北壁冬季単独登攀のうえにさらに光彩をそえた。（敬称略）

（片山全平）

四姑娘山登頂の報告

同志社大学四姑娘山登山隊

川田　哲二

　七月五日、盛大な見送りを受けてわれわれ八名は四姑娘山の待っている中国へ発ちました。前回の四姑娘山がご気嫌斜めだっただけに今回何とかわれわれのプロポーズを受けてもらえるよう、若さと誠意と同志社で培ってきた不屈の闘志をもって当らねばならないことを全員で決意する。

　七月八日には早くも日隆（リーロン）という村に到着するが、ここ数日の間にいくつかのトラブルがあった。その一つは成都で日本からの

っても、彼女たちから学ぶところが多かったことは大きな収穫であったと思います。

七月二十五日、重量オーバーのおみやげと、そしてそれよりももっともっと大きな友情と思い出をいっぱいに持って、三人は元気に帰国していきました。これからも、この三人をはじめ、たくさんのインドの仲間と、充実した楽しい山登りを続けていきたいものです。滞在中のプログラムをご報告し、あわせてご協力下さいました大勢の方々に、会報紙上をお借りして厚く御礼申しあげたいと思います。本当にありがとうございました。

＊

七月四日成田着、伏見会員宅へ、七月六日東京発、上高地より徳沢園へ向かう。上条さんが上高地まで迎えて下さる。同行は信濃支部の稲越さんを含め九名で計十二名。七日、雨の中を出発。ザイテングラートも残雪が多く、ほとんどキックステップでコルへ。穂高岳山荘では久しぶりの女性客というので、神さんの映画やお茶で歓迎して下さる。八日、濃いガスの中をはじめて日本のピークである奥穂高の頂上へ登る。朝食後再びザイテングラートを下る。コル直下の急斜面で、神、稲越さんがロープを固定して下さる。帰京組五人と徳沢で別れ、ゆっくり山研へ。津村さんがお赤飯と天ぷらで待っていて下さった。

七月九日、その日も雨の中を西穂山荘へ登り、ケーブルで新穂高へ。そして夕方高山山貴旅館でくつろぐ。十日、知人の伊藤ご夫妻が車で市内を案内して下さった。富山へ移動、会員の親類の豊田さんと昼食、明日からの山行の食糧を買う。夕方文部省立山登山研修所に到着、泉田所長にお話を伺い、設備を見せていただく。

七月十一日、前夜発の後発メンバー六名と合流、剣沢の研修所前進基地へ向かう。研修所から専門職員の柳沢さんが同行して下さる。室堂からは幸い青空も見えて、立山の残雪もようが美しい。剣沢の基地は快適だ。夕食は日本製モモ。インドの歌も出て楽しいが、夜雨が激しい。十二日、曇。松永、柳沢さんのリードで平蔵谷をあがる。コルの少し下から右手のルンゼをつめ、源次郎尾根から頂上へ。頂上はまたもや展望なく雨も降り出す始末で、早々に一般ルートを平蔵のコルへ、そして再び平蔵谷を下る。今夜は花火とコーラス大会となる。十三日、基地の清掃をして出発。大汝から雄山へ向かう。雲の動きは早いが展望なく、せめて一瞬、遠来の客のために晴れてほしいと希うのだが、雄山ではとうとう降り出してしまう。帰京組と頂上で別れ、ゆっくり室堂経由雷鳥沢のロッジ立山連峰へ下る。これで山行は予定通り

送信を受信するテスト中、受信機が故障してしまったこと。この故障は今後の登山期間中、日本から気象情報を受ける重要な役割をもっていただけにショックであった。

もう一つのトラブルは京都から発送した隊の荷物がいまだに北京に到着していなかったこと。どうも幸先の悪いことで、前途の多難を暗示しているようで嫌な思いをする。

七月十二日、悪天候の中、四姑娘山南面側の四五〇〇㍍にベースキャンプを設営するが、四姑娘はわれわれとの対面を拒んでか、その顔を深くガスの中にかくしていた。翌日からさらに天候は悪化し、三日間動くこともできなかった（この三日間の悪天候で四川省成都周辺の各地では大洪水が起り、百数年振りの大水害ということであった）。われわれの前途はさらに暗いものになった。しかし翌十六日からやっと天候は回復し、十七日、五二〇〇㍍の地に第一キャンプを設営。これより平均斜度四十五～五十度の、岩と氷の狭い溝（クーロアール）の登攀に取り組み、わずか四〇〇㍍の高度差を突破するのに落石と雪崩の洗礼を受けながら六日間の日数を費やしてしまった。本当にこの四姑娘は男嫌いなのか、ジャジャ馬なのか、われわれのプロポーズをあくまでも拒むようであった。しかし若い隊員はその苦難にもくじけず、忍耐と寛容の精神をもって前進をつづけていった。

二十五日、東南稜上五七五〇㍍の急雪稜を二日間にわたって削り、なんとか小さなテント地を確保して第二キャンプの設営に成功。

主峰（6250㍍）を目差し南東稜を行く

やがて真珠の首飾りと呼ぶ起伏の多い雪稜の登攀にかかり、この首飾りのルート開拓にさらに二日を費やし、七月二十八日十二時、ついに第一次登頂隊（吹田、角谷）が四姑娘山の頂き（六二五〇㍍）に立つことに成功した。つづいて二十九日、第二次登頂隊（高橋、岩田）が同峰第二登に成功、三十日には第三次登頂隊（宮崎、田川、紅野）が同峰第三登に成功したのち、宮崎、田川が北峰の初登頂にも成功するという快挙をなしとげることになった。

三十一日、全員ベースキャンプに集結し、喜びを分ち合う中で、われわれを受け入れてくれた四姑娘山に何かプレゼントを贈呈すべきであることを思い、四姑娘の顔の上にある岩壁を「冠」と名づけ、頂上にある巨大な氷塊を「ダイヤモンド」と名づけ、さらに首から肩にかけて続く凸凹の雪稜を「真珠の首飾り」と名づけることにし、「冠」と「ダイヤモンド」と「真珠の首飾り」をプレゼントして、われわれは四姑娘に別れを告げたのである。振り返ると四姑娘の目から茶色の涙が流れていたことが印象的であった。それは征服された喜びと、別れを惜しむ涙ではなかっただろうか。

以上簡単ではありますが登攀の概要を報告申し上げると同時に、山岳会々員の皆様方の絶大なるご声援とご協力に対し、深く感謝の意を表したいと思います。本当に有り難うございました。四川省体育協会の王さんから頂いた言葉が忘れられません。

〝壮士征姑娘　　姑娘愛壮士〟

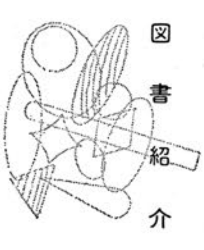
終ったことになる。疲れているだろうが、三人とも陽気でいつも楽しい。

　七月十四日、室堂発一番のバスで下山。皮肉なことに梅雨が明ける気配で、下界は晴れて暑い。粟巣野の会員の親類宅に立寄り、家具工場を見学したりする。雷鳥十六号に乗車、大阪に着く。今西支部長、金井、宗実さんが迎えて下さり、美々卯でごちそうになって今西さんのお宅へ向かう。

　七月十五日、津田、松村さんに六甲や植物園につれていっていただく。神戸登山研修所では、見学後前田さんがお手製のカレーをごちそうして下さる。神戸ではご不在の宮崎市長に代わって参事の方がポートピアの説明をして下さった。ポートピアはすいているパビリオンを見学する。三人の希望で六甲サリーに寄り、サリーを買う。夜は支部の方々がホテル・プラザ翠園で歓迎会をして下さり、サリーで出席。十六日、大阪市内見物と買物。今日は初めてインド・ヒマラヤのトレッキング説明会を支部で開いていただく。林欣子さんが通訳して下さる。その後、奈良の久野会員宅へ。ミーナと久野夫人は、第一回合同登山（一九六八年）以来の再会である。

　七月十七日、奈良で東大寺、博物館、薬師寺などを見学。今日は特に暑く、日本人はバテて、インド人が熱心に見て回ることになる。

図書紹介



佳境に入った烏水全集

小島烏水全集（大修館書店）の刊行についてはすでに「山」四二五号（一九八〇・一一）に紹介したが、第一巻『初期文集』の刊行によって全十三巻、別巻一の半ばを越えたのを機に改めて紹介せよとの書評委員会の依頼なので、ふたたび本欄を借りることにする。

　第一巻の内容が持つ意義は、烏水の全体像に迫ろうとするときまことに大きいといわなくてはならない。収録されているのは、烏水最初の単行本『扇頭小景』のほかに『木蘭舟』『銀河』の二著と、単行本未収録、というよりは今回はじめてまとめて公にされることになった初期文集である。とりわけ最後のものは、烏水十五歳から二十歳の間に書かれたもので、Y校の同人雑誌「学燈」収載のものを主体に四十篇をかぞえる。世情一般に敏感に反応するこの歳頃に、小島久太が自然と文学のほかに何を見、何を考えていたのか、それは後年に形成されるあの巨大な山脈に向かって平野から丘陵へと次第に傾斜をましてゆくプロローグの部分にあたるわけで、まことに興味深い。

　『扇頭小景』を含む初期の三つの著作は「紀行文学者として、自然美の研究者としての出発点」（近藤信行氏解説）だったが、それが生み出される源になったY校時代の文章が今回はじめてまとめられたわけである。編者の苦労はすべての巻にわたって数限りなくあるだろうが、二十歳前の、これまでは幻のものとされていた文章を発掘収録することに成功したのは、この全集刊行の意義と価値とを不朽のものにするに足る画期的な業績であろう。絢爛とした後年の文体の萌芽がそこにあり、一読、これが十六、七歳の少年の手になる文かと、誰しも驚嘆の想いを抱くだろう。

　なかには自然美の追求者としての烏水からは想像できないような「世界豪傑物語」というユカイな一篇もある。「近藤勇、力士を斬る／坂本龍馬、雨中に水練を学ぶ／栗本鋤雲、佛帝ナポレオンの奸謀を挫く」などと見出しを列記しただけで、誰もがのぞいてみたくなるものだが、「偽少年を驅る檄」には、歌舞音曲に狂い、紅燈の巷を徘徊する優柔不断の学生たちに対するプロテストがあり、後年、上高地は神河内が正しいとして譲らなかった烏水の原型と、屈折した若き日の久太の心情とがうかがわれて、烏水の新しい側面が明らかになってきた。

　ところで、烏水全集刊行の進度が予定とちがうために多少の騒音がたちはじめているということだが、これら初期文集の発掘作業の手間と手順とは鉄道の運行とはちがうのであって、しかも前回も触れたように、これほどの厳密な校訂をへた本造りも従来の山の世界にはなかったことである。創造的な作業の進行に対しては、期待して待つこともまた版元と編者への大きな力づけになる場合があることを、全集の一日も速い完結を願う読者のひとりとして付記したい。（大森久雄）

ヴァリス・アルプス
——特選100コース——

ミシェル・ヴォシェ著　近藤　等訳

レビュファが監修する特選100コース叢書の一冊。多数のヴァリス・アルプスの山々からどのコースを選ぶかを著者の主観とならぬよう、何人もの仲間のガイドから助言をもらい選んだという。

　グラン・コンバンの一般ルートから極端にむずかしいマッターホルンのツムトの鼻まで幅広く選び、本会の故田口一郎氏や、ブラヴァントといった人々が一九三九年にねらい、荒天のため果せなかったアルプス最高度差の壁、モンテ・ローザ　イタリア側のマクニャガフランケもガイドされており、今まで国内でみられた日本人による同種の案内書と違い、かなり公平、正確に選択記述され、ヨーロッパで出版されているこの種のガイドブックを丸写しするようなところもなく、夫々の豊富な幅広い経験にもとづいてつくられている。

　美しい写真とともにこの本がヴァリス・アルプスの好案内書であることはまちがいないが、日本からこの重い本を現地に持っていくには重すぎるし、本をばらばらに分解するには値が張る。最近筆者の見たグルトナーというスイスの学者が書いた案内書の定義なるものを見ると、案内書は旅行の前、旅行中、旅行の後に必要とされること、とその条件が述べられていた。この点からすると、特に遠い日本にいては、この案内書は要求される一つの条件に欠けているともいえよう。しかし付言しておきたいのは、もうこの原著の初版は、とうに現地では売り切れてしまったということだ。

夕方久野夫妻に奈良ホテルのディナーをごちそうになり、京都妙覚寺へ向かう。

七月十八日、金閣寺、仁和寺、高雄高山寺などを回る。会員友人の関原さんが案内して下さる。十九日、妙覚寺を見せていただく。立派な古いお寺である。午後こだまで東京へ。小田原で清水、小倉会員にバトンタッチ。富士山はとうとう姿を見せてくれなかった。小田原より大勢の仲間が待っている小原会員宅へ。賑やかな夕食の後、逗子海岸へ泳ぎに行く。

七月二十日〜二十四日、都内で多忙な日を送る。インド観光局主催の記者会見やトレッキングPR、朝日カルチャー登山教室と山岳会でのトレッキング説明会など。ミーナは専門（小児外科）のこども医療センター見学、チャンドラーは「岳人」のインタビュー、ラマはインド銀行に挨拶に行くなどである。また、井本夫人、吉田宏会員ご夫妻が昼食に招いて下さったり、ナンダ・デビ、カメット、ケダルナートのメンバーが歓迎パーティをして下さるなど楽しい日々の連続であった。吉田さんとの会には植村直己会員も同席して下さり、エベレストに関心の深いインド・メンバーは大変嬉しかったようである。

七月二十四日　ルームでトレッキング説明会のあと歓送会を行ない、佐々会長以下約四十名の出席で賑やかだった。インド登山財団からJACへの贈り物が、ミーナから佐々会長へ手渡され、山岳会からもペンダントが贈られた。三人の美しいサリー姿が印象的な和やかな会であった。

七月二十五日、AI三一五便で帰国。手荷物が相当重量オーバーして慌てる。婦人懇談会メンバーが大勢見送り、再会を約して名残りを惜しんだ。

（山口節子）

一九八〇年十二月　山と渓谷社刊　定価六五〇〇円　二六〇頁

（岡沢祐吉）

完訳　アルプス登攀記

エドワード・ウィンパー著
H・E・G・ティンダル編
新島義昭訳

本書の内容については岩波文庫（浦松佐美太郎氏訳）や旺文社文庫（石一郎氏訳）で、ご承知の向きも多いと思うので多くを語ることを慎しみ、ここでは主として二種類もの文庫版が既に普及定着しているにもかかわらず、敢えて新訳単行本化して出版した意図等に焦点をあてて紹介したいと思う。

本訳書は、ウィンパー没後にその日記、手紙等の新資料を加えてティンダルが編集した原著第六版を底本とし、文庫版では大半が削除されている付録や原注を余すところなく訳出し、その上、ウィンパー存命中に自らが編集した第五版と校合して、第六版で削除されている章、項、表等の全てを「補遺」として巻末に収め、訳本としての完璧を期した、文字通りの完訳本である。

付録や原注は、物語の展開には直接は関連しないが、本書に限っては、これ等にこそウィンパーの読者に対する心づかいが現れており、科学的で理性的な性格が裏付けられている。従って、これ等をトータルに味ってこそ真のウィンパー像が得られようという貴重な部分である。この点については訳者がいみじくもあとがきで「付録や注の一つ一つにまで著者の細かな心配りが感じられ、ストーリーの展開に心を奪われていたときには見過していた、ウィンパーという人間の内面に一歩近づけたような気がした」と記しており、二種の文庫版が普及しているにもかかわらず、敢えて完訳本として出版した意図が強く感じられる。私は、そうした意図の下に訳された本書を精読して、このアルプス文献中の不朽の名著を、名訳とはいえ、付録、挿絵、原注の大半が削除された文庫版で初めて味った先輩方を、ウィンパーのためをも含めて不幸に思った。そして同時に「翻訳出版は完訳で」という本書刊行の最大のねらいが、今後の岳書界の良き慣例となることを期待せずにはいられなかった。

完訳本に次ぐ特色は、主としてウィンパーの手になった挿絵の原寸による完全な復刻再現である。でき栄えは、当然のことながら文庫版を遥かに凌駕しており原書の雰囲気をも味わせてくれるまずまずの出来といえよう。ほかに、文庫版では割愛されているが、この種の書物には是非欲しい原著者の辿ったルート入りの地図が復元の上添付されている。また、巻末にはウィンパーの小伝と初版から六版まで、版を改めるたびに増補・改訂・改編が施されている複雑な原著の、それぞれの相違点にふれた簡潔な書誌が訳者によって解説されている等、良心的な訳本となっている。

訳文の良否については門外漢であるが、極めて平易に書かれており、若い世代や一般読者にもわかり易く工夫されているところが随所に見られ、三年にわたったという訳者のご苦労が窺える。（但し、一八六三年八月三日午後から翌日にかけての訳が少しおかしくつながりが悪いのが目にとまった。）

以上のように本書が、文庫版としての制約から、望みながらも果せなかった幾つかの難点を補っての単行本化であることを岳書界のために大いに慶びたいと思う。

以下は、望蜀を若干述べさせて戴く。八ポの二段組は如何にも読みづらく、できれば活字をひとまわり上げた通し組みとして欲しかった。また、編集上のミスなのか底本としたティンダル編の原著第六版にもある極めて有用な索引を削除してしまったのは如何なる意図か。この浩瀚なアルプス文献の価値をより高めようとする配慮を継承し得なかったことは、完訳を看板にした本訳書としては将に画竜に点睛を欠き、残念というほかはない。再版の折には、よろしく追加すべきと思う。

一九八〇年十二月二十五日　森林書房発行　A5判　五三六頁　別添地図付　定価六五〇〇円

（滝川　清）

図書紹介

高所登山と順応

—カンチェンジュンガでの体験—

山森　欣一

私たちは、本年プレ・モンスーン期にネパールヒマラヤ・カンチェンジュンガ山群において、八五〇〇㍍ラインの縦走登山を目ざした。残念ながら目的としたヤルンカン（八五〇五㍍）とカンチェンジュンガ主峰（八五九八㍍）の縦

走はならなかったが、それへの挑戦の結果として、ヤルンカン五名、主峰六名の同時登頂を果たし、縦走態勢を一応両峰の頂上へ持ち上げることができた。

高所登山の成功が、登頂にあるとは必ずしも言えないが、われわれの目的は八五〇〇メートルラインの縦走であったので、この登山はわれわれにとって完敗であったといえよう。

高所登山の中で目的達成を阻害する要因は幾つか考えられるが、一般的にいえば酸素の稀薄な中で行われることが高所登山に共通した要素と考えられる。今回の登山の戦術を立案し、登山の現場で考えた低酸素下への順応について述べてみたい。

高所への順応については、すでに多くの先輩たちの貴重な体験や医学的な研究から、基本的には「上下運動」を中心とした幾つかの組み合わせがより効果的であることが知られているので、われわれもちろんこの原則に従うことにした。問題は、①限られた登山期間の中で一定のローテイションを崩さないで順応活動を行うための対策、②上下運動を行っても順応できないラインから上への対策、③長期間にわたる高所での行動による蓄積疲労への対策であった。

まず、順応は単なる物理的な一定の上下運動だけでは勝ちとれないものであるとして、隊員一人ひとりの順応への積極的な姿勢を期待することをベースとした。ついで、ローテイションを崩さないためには、悪天停滞を作らないルート設定を心がけ、かつ、固定ロープは積極的に使用すること。また順応が疑問な高度への上下運動は極力頻度を減らすこと。明らかに順応が考えられないそれぞれのファイナルキャンプ(八三〇〇メートルと八二五〇メートル)へのルート工作や荷上げは各人一度だけに止め、この領域では積極的に酸素ボンベを使用すること(特に睡眠用酸素が抜群の効果があること)。最後に、蓄積疲労については少なくとも、アタック態勢が整った時点では、全員をいったんベースキャンプ以下におろし、できうる限り長い休養を与え疲労の回復を計ることにした。

これらの要素を計画的に組み入れた行動表に基づいて、現場ではこれらの条件をいかに守り抜けるか? 守り抜く強い意思こそが、高所登山の現場では大きなウエイトを占めまた必要とされる。

このような戦術の中で最も重要なことは、それが、掲げた目的達成のための効率的な手段であるとともに、高所登山戦術のまずさから発生する事故をも防ぐ、最良の方法でもありうるのである。

高所登山の攻撃は、防御をもあわせ備えたものでなければならない!! という簡潔な、しかし、最も重要な教訓は多くの事故報告の中で繰り返えし述べられていることである。

ものごとには、常に新しい工夫が必要であるが、そればかりでなく、基本に忠実に戦術を展開できるか否かが高所登山の成否を大きく左右するものと痛切に感じている。(日本カンチェンジュンガ学術遠征隊)

科学研究委員会第九回講演会概要
(昭和五十六年六月二十三日 ルームにて 参加者二十四名)

山をめぐる宗教と伝承

慶応義塾大学教授 宮家 準氏

日本の山岳信仰では、最初は山に神霊がいると信じ、特に山の神から水を頂くといういわゆる水分(みくまり)の信仰が広く認められた。そのうちに人間がこうした聖地の山で修行するようになり、山が宗教者の拠点となって来た。これらの人々は優婆塞(うばそく)と呼ばれている。やがて各地の霊山では神話が作られ、縁起が固まって来た。これは大体平安末期から室町にかけてである。

このようにして山岳宗教は熊野、吉野を中心に東北から九州へと及んで行った。そして出羽三山をはじめ、日光、富士山、箱根、戸隠、立山、白山、熊野三山、金峰山、高野山、伯耆大山、石鎚山、英彦(ひこ)山、求菩提(くぼて)山、宝満山などではそれぞれその開山の伝承が作られていった。

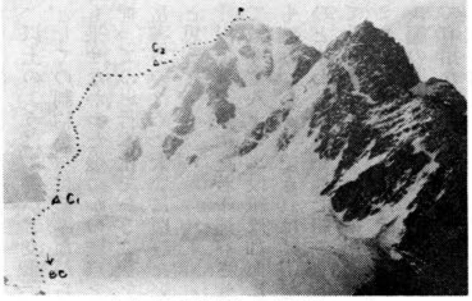
たとえば出羽三山は羽黒山縁起(一一四一年)によれば、推古天皇の五一三年能除大師(崇峻天皇の御子である蜂子皇子)によって開かれたとされている。大師は由良の浜から八咫の烏に椙の木の下まで導かれ、その下で生身の観音に出会った。観音は竜神の娘で、これが羽黒権現となり、さらに大師によって、月山には阿弥陀、湯殿山には大日が祀られることになっ

東西南北

ボゴダ峰遠征隊より

学生部博格達峰遠征隊出発に際し、会員の皆様より多大なるご支援をいただき有難うございました。

中国最長の鉄道で北京より西へ向かうこと約三八〇〇キロメートル、三日と六時間の硬車寝台での旅で終点のウルムチ着。そして八月十二日ボゴダ主峰(五四四五メートル)北側のグラチマイロ氷河右岸のサイドモレーン上三五九〇メートルにベースキャンプを建設しました。ボゴダ山群は北海道の北端に位置するだけあって、標高のわりには大きな氷河を持ち、立派な山容です。入山以来連日不安定な天気に悩まされました。一日の中に降雪、晴れが何回も繰り返され、三十分後の天気すら予想が困難です。この山群は周↖



ボゴダ峰(主峰)と北東稜ルート

た。出羽三山は諸人の病を火によってなおす功徳があるといわれている。

なおその他の個々の山の開山伝承は紙数の都合で割愛して、これらを綜合すると、開山の年は六世紀から九世紀にまたがっているが、フィクションが多く正確なことは判らない。しかし大体奈良時代に仙人とか宗教者が出て、山々が開かれ、ここに修行者が集まって行ったものと考えられる。

開山者についても、空海のような高僧はむしろ後の時代に出たもので、半僧半俗の人間とか、シャーマン的な力を求めた宗教者、あるいは外国の僧が大多数を占め、中には彼等の刺戟を受けた猟師自身が開山者になった例もある。

開山者をその山に導いた者は先住者である山人の場合が最も多く、他に、鳥（出羽三山）、熊、蛇などが伝えられている。

次に神仏が現われた場所は圧倒的に洞窟が多く、付近に水がある洞窟内の岩や木の許に出現している。これらは日本における修験道の場所としての特徴を表わすものである。

現われた神の種類としては、イザナミ、月読、大山祇などがあるが、これらはいずれも菩薩、地蔵、不動、大日などを本地としその化身とされている。またこれらが水晶（熊野三山、英彦山）あるいは九頭竜や八鬼の姿をしてあらわれることもある。

こうした諸山の伝承は、諸山縁起や今昔物語、日本霊異記等大体平安初期のものに収録されている。

その後、これら諸山は次第に宗教センターの趣を呈し、神道とも合流し、近世には講中による民衆登山の霊地として発展することになった。

↙囲を砂漠に囲まれ、夏の強い上昇気流がそこら中で発生、この山で冷されるためと思われます。

このネコの目天気にやられ、ボゴダ主峰登頂は予定より遅れましたが、学生中心としたガンバリで八月二十八日三名、翌二十九日二名が北東稜をたどり第二登に成功しました。

ボゴダ山群で現在知られているところは、ここグラチマイロ氷河とシプトン、ティルマンが三十三年前に踏査した南面のチゴ氷河までなので、今回は未知の氷河を広く歩き回ること、そしていくつかの山に登ることが目的でした。しかし中国登山協会と交した議定書には「北面よりボゴダ峰」としか記載されておらず問題になりました。北京と協議した結果、今年はボゴダ主峰および主峰の東十㌔メートルに位置する第二の高峰五三一二㍍（この山については写真もないといわれる）の登山、ボゴダ山群中心部の一周をしてもよいということになりました。この山群は中国も科研（学術調査）すらしていない未知の領域なので、残った登山期間中、第二の高峰登山とともに全力をあげてこの地域の踏査をしたいと思います。

なお先発隊十一名中織田沢、児玉は八月二十八日下山。後発隊鹿野以下四名は九月三日入りの予定です。（八月三十日）

（梶　正彦）

上高地山研礼賛

山崎金次郎

齢、八十路に入ると、好きな山登りも足がいうことを聞かず、思うようにできません。やむを得ず、昔、草鞋で歩いた丸木橋の頃の河童橋を思いながら、今日の立派な釣り橋を渡り、昔かわらぬ梓川の清流のほとりを散策し、指呼の間に聳える穂高連峰の雪嶺を仰ぎ見ながら、百㍍ほど先の、静かな佇（たたず）まいの山研まで欠かさず出掛けるのです。

私はこの山荘が九年前に建て替えられた時から、毎年三、四回いちばん暇な週日をねらってお邪魔することにしています。土、日曜以外の山登りの人は、みなこの山荘で小休止し、管理人の津村夫妻の心温まるもてなしに感激しながら、それからは登れるだけ奥の小屋まで行って泊るので、後には再び静寂が戻ります。朝は鶯の声に目を覚まし、夜中にはほととぎすの声が聞えるなど、山荘は本当に静かです。

朝はゆっくりと起きて、津村夫妻とともに朝食をとり、ロビーから今日の天気具合はと六百山を窺います。天候の如何にかかわらず、スケジュール通りに明神池への道を往復する観光客は、樹間を通してかすかに見える程度です。

私は山研にくると山の友人たちに絵葉書を出して、ご無沙汰を詫びることにしています。そして折りにふれ津村の小母さんの話を聞くのを楽しみにしています。津村夫妻から、敗戦時は北鮮にいて、抑留生活、脱走と苦難の道をたどり、ようやく内地に帰還したという苦心談を聞きました。縁あって山研に来られ、ここそわが人生の終着駅と喜んでおいでですが、今度はいつまで勤められるかと心配している様子です。私はお二人が山研に来られた時、本当に適材を適所に得たものと思いました。

山へ登る人はもちろん、山研を訪れる、仕事で来る人も、土地の人も、真心こもった津村さんの持て成しを受け、一度ならず二度三度と都合をつけては訪れます。

私はこの間、津村の小母さんが寄稿した『新しい老人』（六月号）という小冊子を見せてもらいました。ここに紹介させて頂きます。

お二人ができるだけ長く山研に留まられるよう私は切望する次第です。

＊

母として

津村はるの

泣いたとて泣いて見たとて返らぬものを、忍び泣く夜の胸の中。抱いて寝かせて頬よせて、強く生きよと泣いた夜も幾夜かな。明治・大正・昭和と世は過ぎて、時代と共に人の心も変わり行く。愉しいこの世に生まれ来て、儚い夢と悟りつつ眠れぬ夜はすすり泣く。私にもこんな時がありました。それには次のような事があったからだと思います。

昭和十九年のことでした。百日咳が大変流行し、その時、生後六ヵ月になったばかりの男の子は百日咳に罹り、肺炎をも併発し、かわいそうに生死をさまようことが幾度かありました。咳に苦しみ、呼吸も絶えだえに、冷え行く幼児を胸に抱き、死んではいけない、死なせては……どうか助けて下さい、生かして下さいと夢中でした。私の命ちぢめても、この子の命を救って下さいと、狂わんばかり一生けんめいに祈る母でした。

幸いにして生き返ったわが子は、神の子のように大切にしました。その後、抑留生活脱走と苦難の時もありましたが、最期はいっしょにといつも心

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

に決めていた私でした。

月日は過ぎて大きくなるにしたがい丈夫に育ち、貧しい生活の中にも親子四人が助け合い励まし合って暮らしました。「喜びもかなしき事も分け合いて共に築かん愛の庵を」とささやかながらも親子の住める家を作り小さな幸せでした。

その幸せも短く、親思いの娘を嫁がせその淋しさを嫁を迎えることによって埋めようと、人のお世話で嫁を迎えることにした。可愛い息子夫婦のために姑に気兼ねがあってはいけないと心を配り、住む所は別棟を作り廊下一つ隔て、食事はいっしょにスープの冷えない程度にということにした。

しかし、私の考えているように甘くはありませんでした。農家に生まれ二十数年、違う家庭に育った末娘である嫁は、なかなか馴染みませんでした。先にも記したように、余りにも仲の良い親子の中には住みにくい所があったと思います。また私の期待が大き過ぎたのでしょう。新婚旅行から帰って来た時、私は言いました。

「何もない私共の家には隠し事がない、お互いに話し合い助け合い、喜びも悲しみも分け合って行きましょう」と語り、わずかばかりのものを渡しました。無口の嫁は何も話しません。話しかけても、次の言葉が出ないようなわびしい返事でした。近づき良くすれば、迷惑のようでした。食事もそこそこに引き上げて行きました。それのみか気に染まぬ時には、物に当たるという情けない淋しさでした。

こんなことではいけない、何とかせねばと、つぶれものにさわる思いでした。幾夜考え泣いたかわかりません。いくら泣いてもどうにもならないことでした。涙の中からもう一度立ち上がろう、強く生きようと戒心。こんなはずではなかった、一からやりなおそう。親が重荷になるようでは、今迄してきたことが水の泡。可愛い息子達夫婦のためにも、老いた自分等のためにも、もっと明るい楽しい生活があるはずだと思い、引き揚げ以来つづけた小店を止め、老いを忘れ働くことにしました。

幸い昔、看護婦をしたことのある私は、寝たきり老人の世話に行くことにしました。この時三年前脳血栓で倒れ、ようやく自由の効く体にもどった主人もいっしょにとお願いしたが、断わられました。どうしよう、おいて行くわけにはまいりません。迷いました。

ちょう度その時、知人のお世話で上高地に日本山岳会山岳研究所が出来、管理人を探しているということで、二人で行くことになりました。俗界をはなれ自然の中で山人のお世話をすることが楽しく、傷ついた私の心を慰めてくれました。雄大な自然の中の生活は何より美しく、荒れた身も心も清められ、すべてを大らかな気持ちで受け止め、また見ることができるようになりました。

そればかりか手がふるえて字も書けなかった主人が、書くことができるようになり、六ヵ月別れて暮らす間に嫁の固い口もほころび心も開き、孫も出来、私共の思いやりも無駄ではなかったように思います。

この時六十六歳でした。若い人には若い人の生活があるように、私にも私なりの生活も希望もあります。冬の寒い間は自分の好きなお針をし、娘の方と我が家の手伝い、女の仕事は限りなくあります。良いように使われると思いながらも、元気で動ける間は幸せと思い蔭ながら我が子の幸せを祈る母でございます。

上高地へ行くようになって、繰り返すこと今年で八年になります。いつ迄つづくやらと思うと、不安に目の前が暗くなりそうです。この世に私の願いが叶うなら、今のままで良いから十年つづけたいと思う私です。

うつりゆく嶮しき世にもくじけなくいたわり合いて八十路越すまで

明治の母は強けれど涙もろく、いつも十字架を背に生きて来ました。亡き母の言葉を思い浮べ、人には春風のように温かくやさしく、自分には秋風のように冷たく夏の陽ざしのように厳しくと聞かされましたが、今の世には通じないでしょう。

(390-17 長野県南安曇郡梓川村字丸田)

お知らせ

愛知県三河山地
現地集会の案内

東海支部
青年懇談会

奥三河の山は訪れる人も少なく静かな山域です。佐々会長もご出席の予定です。多数の参加をお待ちしています。

日時 十一月七日(土)〜八日(日)

予定 七日午後五時 鳳来町玖老勢 山びこの丘に集合、宿泊と懇親会。

八日 棚山(七六〇㍍)川売道および大石入沢(沢登り)経由頂上にて合流後玖老勢峠より下山。雨天の場合は鳳来寺山登山。現地へは国鉄豊橋駅より車で送迎。

費用 一泊三食付 五〇〇〇円

申込 〒460 名古屋市中区橘一ノ二七ノ八(株)尾上機械気付 日本山岳会東海支部現地集会係宛、官製葉書に住所、氏名明記の上申込み下さい。折り返し詳細案内書をお送りします。締切は十月末日です。

お知らせ

登山技術研修会

登山技術の
原点を見直す

—ザイルの結び方再考—

日時 昭和五十六年十一月十四日(土)午後二時〜五時

場所 山岳会ルーム

内容 技術映画映写・ザイルの結び方実習

持参するもの 五㍍(∅8〜9㍉)のザイル、カラビナ二個、スリング二〜三本

会費 五〇〇円(懇談会費)

申し込み 電話にて事務局へ連絡ください。

(指導委員会、松永敏郎)

お知らせ

チョモランマ登山隊
報告書出版記念パーティ

十一月十四日(土)午後六時より四ッ谷の麹町食糧会館にて行います。**会費は本代四八〇〇円共七〇〇〇円**です。松浦輝夫氏の「エベレストからK2へ」の講演と「チョモランマ賛歌」の披露など。**申込みは事務局まで。**

◉報告

日高山脈

カムイエクウチカウシ山

札内川本流—八の沢遡行

北海道支部

今年の北海道支部山行が、日高山脈の中央カムイエクウチカウシ山(一九七九・四㍍)に登山と決定したのは、五月三十日の支部総会であった。八月二十六日(水)地下鉄白石駅から、バスで帯広の南約三十粁ほどの、中札内村を目指し出発した。この企画に参加された方は、東京、函館、伊達、札幌等二十四名、バスは雨天を突いて、日勝二七四号線を走る。車中では早くもお天気祭りである。

集合地、河西郡中札内村公民館に着いたのは、午後十時半であった。中札内山岳会の香川さん達の出迎えをうけ、談話室で交流会が開かれる。

二十七日(木)午前九時、公民館を出発。札内川林道七の沢砂防ダム工事現場まで、一時間ほどで到着、身じたくを整えいよいよ沢の水に浸る。午後三時、八の沢出合に着く。仕事の都合で、ここまで荷上げを手伝ってくれた、帯広の山田進会員と別れキャンプとする。

大きな流木を集めた焚火は、満天の星空に赤々と燃え上り、石狩鍋に舌鼓を打ち、集会担当支部委員も心づくしの大鍋に、次々とお代りを出され大忙しである。もちろんウイスキーやお酒が出ると、歌も出て、夜ふけまで美しいコーラスが札内川の渓谷に谺（こだま）した。明日はとたかぶる心に、なかなか寝つけない。

二十八日（金）午前三時三十分起床、朝食をすませ五時出発、八の沢を遡行する。七時半雪渓が現れる。八時、スノーブリッジを潜り抜け、滝を巻き、薮を漕ぎ、渓谷を渡り、石を飛び越え、十一時にカールへ着き、昼食。雪渓を横に、正面に札内岳、右にピラミッド、左にカムイエクウチカウシ山を眺めながらの食事は、何にも優る豪華なものであった。カールには、高山植物が咲き乱れ、文字通り花を添えてくれる。午後一時、登頂、年齢順に一等三角点本点に触れる。トップは日高の化石ともいえる、五十年ぶりの相川先輩。続いて一原、望月、佐々木、大塚、橋本と続き、四十九歳の者は月割りとなった。握手、乾盃、記念撮影。四方を見回すと、北はニペソツ、石狩、大雪。南はペテガリ、神威、楽古。東は十勝平野が地平線に見え、東南部は太平洋である。日高山脈の切り立った沢筋、幌尻の七つ沼カールが手に取るように近い。一時半、下山にかかる。キャンプに着いたのは八時を回っていた。残雪のオンザロックで、登頂を祝いまたまた乾盃。鰻飯に茸汁が美味い。その夜も満天の星空を眺め、今回の支部山行の成功に、胸も顔も膨らみ、心おどる思いがした。

二十九日（土）午前九時、キャンプ撤収。途中の昼食は札内川の清流で、蕗の葉を敷き、ソーメン流しをする。中札内経由で、帯広市内、恵明荘に入ったのは午後五時に近かった。六時より登頂祝賀と、支部道東集会が、帯広市内、酒房「升本」で開かれ、賑やかな、楽しい四日間の山行の締め繰りをした。

参加者（順不同）小野肇、久保田優一、成田志登美、亀井秀子、小林年、一原有徳、三浦勝幸、井後幸太郎、高橋邦臣、大塚武、川越昭夫、柳田凉子、相川修、浅利欣吉、横田春雄、石井忠雅、望月達夫、佐々木誠、高沢光雄、橋本誠二、平野明、遠藤慶太、井手雅人、香川宗之。（以上登頂者）外に道東集会出席者　小杉伸一、表弘、本多矩。

なお、バスの運転、花の説明、食事のしたく、荷上げ等に活躍された三浦、川越、柳田、山田の諸君と、地元の香川さんには、参加者一同に代り厚く御礼申し上げます。

出羽三山の旅

科学研究委員会

去る七月十一、十二の両日、科学研究委員会による出羽三山に高山植物と修験道を訪ねる旅が催された。

集合は羽黒山神社斎館に午後三時。多くの人は、特別天然記念物に指定されている杉木立に囲まれた静かな石畳の参道を遊登し、ある者は、鶴岡駅より車で直行して、定刻には四十余名が久しぶりの再会を愛でることとなった。

中村委員長挨拶のあと、映写設備のある歴史博物館に場所を変えて、〝出羽三山と芭蕉〟を観賞、入浴を済ませて懇親会を開く。羽黒山に伝わる精進料理を直会（なおらい）と称して食するようであるが、いずれも逸品で、中でもゴマ豆腐、ウドの和え物、ミズナのおひたし等は大好評であった。また山形支部のご好意による発売されたばかりの〝出羽三山記念タバコ〟も添えられ、ところどころで快煙が上っていた。

少し良い気分になったところで科学する心を養うべく、講堂に場所を移して、次の二つの講演があり、一同夜の更けるのも忘れて聞き入った。

「月山の高山植物について」結城嘉美氏、「出羽三山と修験道」戸川安章氏（講演要旨は次号会報に掲載予定）。

佐々会長の「明日はガス山だ」との予想も運よく当らず、夜来の雨も上ってまずまずのお天気である。貸切バスにて一気に八合目の弥陀ヶ原へ。結城先生のお話の、月山にもあるといわれるオゼコウホネに挨拶すべく木道を迂回して登るにつれ、眼下に庄内平野、遠く最上川をへだてて鳥海山、また日本海の海岸線や飛島も見えて来たが、お目当の池塘は例年にない残雪の下、高嶺の花に終る。その地点で朝食をとり、全員で記念撮影など行なった。

九合目の小舎で、所用のため弥陀ヶ原のバスまで引き返し山形へ向われる会長、佐藤テルさんら一行を見送り、俗にいう〝石原三里〟を、アオモリトドマツを眺めたり、豊富な残雪に興じたりしながらゆっくり進んだ。山頂の神社で厳かなご祈祷を受けた後、クロユ

追悼

永年会員

柳沢　悟氏を悼む

若い頃、終身会員となっていたが、自営の仕事の関係で山へ行けなくなった柳沢　悟君が本年二月頃より体をこわし、その後入院や自宅療養をされていたがついに八月二十八日に逝去された。行年七十七歳、肺ガンとのことである。同君とは昭和の初め頃、故松本善二氏（名誉会員）および現に活躍、時々山行をともにしている、山崎金次郎君その他霧の旅会の旧い諸兄とともに山スキーの練習に行っていた。山形県の五色温泉を根拠にして、家形小舎（現在は無し）に泊り、登りが急の、厳ちゃん落しでは、雪崩を注意しながら、いざ右の家形山の大斜面、左の五色沼との鞍部へ登りつめると、風の通り路か、雪は少なく、石ころだらけなので、スキーを担いだり、かかえたりして通り過ぎ、一切経山の乗越へ登れば、正面下に吾妻小富士の旧噴火口を眺め、転倒に次ぐ転倒、今日の浄土平の桶沼の近くに立った硫黄製錬所の壊れかかった廃屋のあたりまで足を伸ばして五色へ帰ったことがあった。ずいぶん古い話しだ。これに柳沢君も一緒したのではないかと思うが、小生戦災で一切を鳥有に帰してしまったので、はっきりしないのは残念であるが、日本山岳会永年会員としてかげながら後援してくれた同君にせんえつながらお礼のご挨拶を申し上げ謹んでお悔みの意を表します。

（野口末延）

図書受入報告

図書委員会

昭和 56 年 6 月受入図書

1. 山村民俗の会編「あしなか第1輯～第 20 輯」複刻版　名著出版 1980 (版元寄贈)
2. N.E. Odell "On the ocurrence of granite in the Himalayan Mountains" Milano 1974 (N.E. Odell 氏寄贈)
3. N.E. Odell "Geology of part of the Central St. Elias Range, Alaska-Yukon Territory : Mount Vancouver in Particular" Printed Private
4. James Duncan & Leonard Cobb "New Zealand's National Parks" Books for Pleasure 1980 (G.J. McCallum 氏寄贈)
5. Peter Radcliffe "Land of Moutains : Tramping and Climbing in New Zealand" Methuen 1979 (G.J. McCallum 氏寄贈)
6. Philips Temple "Way to the Wilderness: Great New Zeal and walking tracks" Whitcoulls 1980 (G.J. McCallum 氏寄贈)
7. Kanai Hiroo "Index Gazetteer of the Himalaya" 2nd ed. 1981 (著者寄贈)

昭和 56 年 7 月受入図書

1. 朝比奈英三・鮫島惇一郎編「札幌から見える山」北海道大学図書刊行会 1981 (版元寄贈)
2. 大森弘一郎著「空撮北アルプスパノラマ写真集」山と溪谷社 1981 (版元寄贈)
3. 徳久・塚本・湯浅・雁部監修「新岳人講座7世界の山Ⅱ」東京新聞出版局 1981 (版元寄贈)
4. 日下部朝一郎著　秩父路ともの会監修「秩父の峠道」木馬書館 1981 (版元寄贈)
5. 1980 年群馬高校教職員インドヒマラヤ登山隊・群馬県高体連登山部海外登山研究会共編「シャルミリ　CB 53 初登頂&ラダック・ザンスカール踏査」 1981 (編者寄贈)
6. 矢田城太郎著「おもいで草　植物採集と登山の覚えがき」矢田次男 (鳳書房制作) 1981 (著者寄贈)
7. 小荒井実写真・文　藤島玄監修「写真集飯豊連峰山と花」誠文堂新光社 1981 (版元寄贈)
8. 韓国自然保存協会編「雪嶽山の自然」 1980 (佐々保雄氏寄贈)
9. Major HPS Ahluwalia「Faces of Everest」Vikas 1978 (H.C. Sarin 氏寄贈)

昭和 56年 8 月受入図書

1. 上中俊治等著「リュックかついで―広島の山歩き」中国新聞社 1980 (上中俊治氏寄贈)
2. 車慕奇著　小学館・人民中国雑誌社共同編集「シルクロード今と昔上西安から敦煌へ」

りなどいろいろな高山植物の咲き乱れる草原で昼食をとる。食事が終った頃、突然通り雨の洗礼を受けた。一日分の雨量が四～五分で降ったみたいな豪快な降り方であった。

カジ小舎を過ぎ、牛首の分岐点で大休止、岡崎さんの吹く〝三山谷〟の竹の音が印象的であった。グリセードを楽しみながら湯殿山神社に下山。

バスで鶴岡に向かう途中、大日坊をお参りし、即身仏を拝す。ミイラは亡くなった者に腐らないよう長期保存術を施したものであるのに対し、即身仏は塩と水分だけを摂り、体の栄養分を消耗し尽して昇華・入定したもので本質的に異なるとのこと、世の肥満児は参考となすべきや。

ともあれ、心配していた天候も変化に富んだ梅雨の晴れ間となり、多数の参加者を得、特に山形支部長村上氏はじめ現地の方々の暖かいご支援を受けて、今回の夏季山旅を無事終えることができ心から感謝している次第である。

参加者　佐々保雄会長、佐藤テル、石黒ひで、浜野正男、山口一孝、吉田実、斎藤健治、織田沢美知子、望月計市、鈴木恭一郎、神原忠夫、原謙一、高田真哉、中垣淑子、片岡博、砂田定夫、小松原一郎、大貫久夫、宿輪浩一、岡崎徳太郎、森村浅香、林桂子、山崎直人、入谷浩右、中村あや、荒野康子、及川昭、及川弓子、堀川清、小林由美子、村上勝太郎山形支部長、加藤達男、木村喜代志、後藤三郎、梅津博、戸川安章講師、結城嘉美講師、中村純二、斎藤桂、梅野淑子、小西奎二、沢井政信、神谷光昭、高橋詢、以上四十四名。

(小西奎二)

海外連絡委員会より

一、洋書販売目録

左記山岳図書専門店より最近の書籍名および定価表が会宛に送付されてきたので、図書委員会へ回しました。希望者は図書委員会に申し出て閲覧されたし。

書籍は三五二冊、ジャーナルまたはガイドブック的なものは一二九冊におよぶ在庫表が添付してある。

Mr. Jack Bainex, Lochaber,
LLANFAELOG,
Anglessy, Gwynedd,
North Wales, LL635TS
England.

(佐藤テル)

二、アメリカ山岳会々長より本会宛に感謝文

田村俊介氏の率いる日本隊は、チョゴリザ南西峰の登頂のチャンスを放棄してまで、ダグ・カナルトの率いるアメリカ遠征隊の遭難救助に参加されたということを、H・アダムス・カーター氏より聞きました。このことは、まさしく最高位に属する山岳行為であります。傷ついたアメリカ隊員達を降ろすのにご助力をいただいた日本隊の素晴しい行為に対し、私はアメリカ山岳会の感謝の念とお礼の気持をお伝えいたしたく存じます。もし田村氏達の働きがなかったなら、アメリカの隊員達は、明らかに遭難死していたでありましょう。あらゆる感謝の表明と、心より尊敬をこめて、ご挨拶を申し上げたいと思います。

一九八一年六月二十三日

アメリカ山岳会会長

T・C・プライス・ジンマーマン

(鈴木郭之)

ルーム日誌

(56年8月)

5日(水)　図書委員会
6日(木)　山研委員会
7日(金)　科学研究委員会　婦人懇談会
18日(火)　チョモランマ編集会議
25日(火)　山岳編集委員会
26日(水)　H・C・サリーン氏歓迎会
28日(金)　青年懇談会

今月の来室者　224名

会員移動 (8月)

支部変更

七七一〇　名和　顕 (東京へ)

物故

三一五　大木　操 (8・13)
二四四八　亀田与三次 (8・16)
七九四八　野中和雄 (8・29届)

会費未納の方はお早く納入願います

事務局

あとがき ―原稿募集によせて―

会報に寄せられる原稿はできるだけ掲載するようにしてますから原稿用紙に読み易い字で、適当な長さ(十五字詰で一四〇行くらい)に書いて送って下さい。支部や委員会に属さず、諸集会にも出席できない会員も多いと思います。山に関する身近かな話題をお送り下さい。また問題提起すべきものをお持ちの向きも、どうすればそれが改善されるのかまで書き、建設的なものをお寄せください。稿料が出ないせいか？ 若い人の原稿が少ないように思えます。会報の復刻版にもみるように、五十年、百年と保存される、特に本会の伝統ある会報に、山にのめりこんだ青春の一時期を記す価値は測りしれないと思うのですが。 (O)

昭和五十六年十月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 佐々保雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京(261)四四三三
振替口座東京三―四八二九番
印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂